

第3回（2010年）「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究奨励賞選考委員会

■選考経過と選考結果

「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」の対象は、卒業生を含む若手の昭和女子大学関係者が著した、博士論文を含む著作が対象である。第3回奨励賞の選考対象となったのは、自薦・他薦を含む20点の単行本と論文であった。

女性文化研究奨励賞選考委員会は、2月3日、3月8日、4月13日の3回にわたり開催され、討議の結果、吉田仁美氏の著作『高等教育における聴覚障害者の自立支援——ユニバーサル・インクルーシブデザインの可能性——』（ミネルヴァ書房 2010年）に、第3回「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」を贈呈することを、4月13日の最終選考委員会において決定した。

吉田仁美氏は、2001年に法政大学法学部政治学科を卒業後、昭和女子大学大学院生活機構研究科生活科学研究専攻を修了。その後、民間企業勤務を経て、同大学院同研究科生活機構学専攻で学び、2009年3月に博士（学術）の学位を取得された。現在、本学人間社会学部福祉社会学科で助教として教育・研究に従事されている。

受賞作は、高等教育における「聴覚障害者」を対象に、特に「女性聴覚障害者」に焦点を当て、これまで潜在化していた聴覚障害者の多様なニーズとその背景について、当事者の視点で顕在化・明確化するとともに、それらに対してどのような自立支援が可能なのか、その方策と実現への可能性を、質的調査に基づいて理論的に提示したものである。

本著作の独自性および意義として、まず、高等教育機関において、障害の有無にかかわらずすべての学生に対して、教育とその環境をより良いものに促進する〈ユニバーサルデザイン〉の概念と、障害をもつ人々を包含し、それぞれのニーズに応じて支援する〈インクルーシブデザイン〉の概念とを統合し、〈ユニバーサル・インクルーシブデザイン〉という新たな概念とその意義を提唱し、「人と人」「人と環境」の相互作用を考慮した教育の保障と自立支援の必要性を明示した点が挙げられる。次いで、高等教育機関における日本の女性聴覚障害者を対象に、参与型研究を導入し、聴覚障害者に特に必要な「情報保障」および「コミュニケーション保障」に対するニーズの多様性の明確化と、その背景についての分析と考察、および女性聴覚障害者が生活者として自立する上での課題を取り上げ、日常生活上のニーズや諸問題を当事者視点での調査を通して顕在化し、「生活経営学」の視点や手法を導入しつつ生活主体の形成について考察した点は、いずれも日本における先駆的な研究として大きな意義を持つものである。さらに、米国の聴覚障害者のための大学であるギャローデット大学における、〈Deaf Studies〉と〈Women's Studies〉を統合した講義や研究の例を参考に、日

本の高等教育においてもマイノリティにおけるジェンダー問題として、〈Women's Studies〉に〈Deaf Studies〉の成果を取り込むことの意義を示唆しており、今後の課題として注目される。

吉田氏の著作が提示する理論と、聴覚障害者の視点で明示された課題は、高等教育における聴覚障害者のケースに留まらず、健常者の病気や怪我等による一時的な「機能障害」を含め、障害者、子供や高齢者、外国人など、「生活機能の障壁」を体験するあらゆる人々の課題とも連関する普遍性をもつものであり、「障壁」を乗り越えて生きるあらゆる道に大きく貢献するものである。受賞を契機として、さらなる研鑽を積み、ユニバーサルでインクルーシブな環境の創出と、聴覚障害者の自立支援の確立に資する研究を今後も進められることを期待してやまない。